

あつる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

スキー登場

日本にスキーが初めて持ち込まれたのは、一八九五(明治二十八)年。松川敏胤大尉がドイツ駐在武官だった時にスカンジナビアで入手し持って来たといわれている。

一方、北海道はというと、イギリス公使館武官アルメーランド・キープが、一九〇六(明治三十九)年、月寒二十五連隊の歩兵隊将校に寄贈したのが最初とされている。しかし両方ともスキーという道具を見せるために持ち込んだだけで、これで滑ってみよう、という発想はなかった。

ルーツは北大生

一九〇八(明治四十一年)年、東北帝大の分科大学(現・北海道大学)にドイツ語講師としてスイス人ハンス・コラーが赴任して来た。

翌年コラーは、語学の教材として母国から両杖式のスキーを取り寄せ、学生たちに紹介した。「スキーはおもしろい、自分もスキーが得意」と自慢するコラー。好奇心旺盛な若い学生たちは、どのように滑るのか見せて欲しいとコラーに迫る。しかし実は彼には全くスキー経験がなかったのである。学生たちが使い方を訊ねても、教えることができない。業を煮やした学生たちは、勝手に北大の中央ローンで滑り始めた。これが札幌のスキーの始まりである。

しかし、それだけでは飽き足らなく

なった学生たちは、コラーに頼んで三角山で初試乗。さらに学生たちは、コラーのスキーを豊平橋近くの馬具屋に持って行き、札幌産第一号のスキーも試作させている。

レルヒ少佐

一般的にいわれる日本の「スキー発祥地」は新潟県高田(現・上越市)。一九一一年、オーストリア・ハンガリー帝国の軍人、テオドル・フォン・レルヒ少佐が第十三師団にスキーを教えた

北海道
歴史秘話
8

スキー発祥の地は サッポロ?



冬季オリンピックの開催日が近づいてきたが、日本のスキー発祥地といえ一般的には、一九一一年(明治四十四)年にオーストリア軍人、レルヒ少佐がスキーを教えた新潟県高田(現・上越市)といわれている。しかし、レルヒ以前にスキーを楽しんでいた学生たちがいた。それがここ札幌であった。

のが、その起源といわれている。レルヒの国も日本と同じ小さな国。それなのに日本は日露戦争で大国ロシアに勝った。いったい勝因はどこにあったのだろうか。軍事研究のため日本にやって来たレルヒだったが、なにしろスキーが大好き。雪のある場所を希望し、新潟へと赴くことになったのだ。

札幌が高田か

ハンス・コラーが札幌で学生にスキー

を紹介し、学生たちが滑ったのは、レルヒよりも前。それなのに、なぜ、札幌は日本のスキー発祥地とならなかったのだろうか?

実は大正時代、「スキー発祥の地」をめぐる、札幌が高田かで論争が起っていた。「確かに最初に滑ったのは札幌だが、正式なスキー術を持ち込み、全国普及へのきっかけを作った高田こそ、発祥の地とすべきであろう」と、当時全日本スキー連盟の創設者であり初代会長でもあった稲田昌植男爵(彼

も北大OB)が述べ、結局高田に軍配があがった。技術講習が行われた時をもって近代スキーの発祥とすることで、決着をみたのである。

北海道にもレルヒが

レルヒは、その後北海道にも来ている。一九二二(明治四十五)年二月、新潟の湿った雪とは違つパウダースノーの北海道でぜひ滑ってみたいという彼の希望で、旭川第七師団を指導するこ

とになった。期間は二月二十日から三月十一日までの三週間。

各連隊から将校三人ずつが出席し、レルヒの指導を受けたが、その中に北海道スキーの先駆者三瓶勝美中尉(のち少佐)ら月寒第二十五連隊の軍人もいた。彼らは札幌に戻った後、三月二十二日に「レルヒ直伝」のスキー講習会を月寒練兵場と月寒小学校裏の丘で開催している。この講習会には軍人四十一名のほか北大の学生や中学体育教師それに一般人十九名が参加。さらに三月二十九日と三十一日には、三瓶ら十名が藻岩山のスキー登山を行っている。

スキーの楽しさを知った彼らは、その後も三角山登山、小樽遠征など積極的にスキーを行った。

羊蹄にも

レルヒはというと四月十五日、旭川から倶知安へ汽車で向かい、十七日に羊蹄山に登る。総勢十一名でのスキー登山であったが、このことを当時の新聞が大きく取り上げたため、スキーとおもしろいものらしいと、大いに評判になったという。

日本そして北海道にスキーを伝え広めたレルヒは、帰国後少将まで昇進。一九四五年十二月二十三日、ウィーンにおいて七十七歳の人生を全うした。札幌と高田の日本スキー発祥の地をめぐる論争は、その後争われることはなかった。



森廣広絵

さん

街の子の常識

商家に生まれ、札幌の中心部にある商店街、狸小路や大通公園を遊び場に育ちました。当時の狸小路界隈は、個人商店のおじさんから飲み屋のオネエサンまで、実に多種多様な人が暮らしていました。「人はそれぞれ、異なる暮らし、価値観、魅力を持っている。人種のるつぼのような街場で暮らしていた私にとって、それはごく当たり前のことだったのです。」

TVには華やかな大阪万博や札幌オリンピックの中継が映し出され、世の中は右肩上がりの高度成長期。郊外に

は、次々とベッドタウン、団地が出現し、新しい街の庭付き一戸建てに暮らすことが庶民の夢でした。そして、一様な顔つきの家々で暮らす人々は、お隣と同じであることに無上の安心感を抱き、いつしか、それが世の中の「常識」となっていたのです。

街の子は、全市から子どもが集まる私立中学校に進学した途端、異分子に人と違つのが当たり前という意識は、世のスタンダードではないことを、さまざまな形で思い知らされることになりました。しかし、その雑多な生育環境こそが、後のモノカキ人生の根底になつていくような気がします。

氷河期のマンモス

男女雇用機会均等法が誕生する少し前、雇用環境は厳しく、氷河期とも呼ばれていました。短大に進み、普通の〇しに憧れていた街の子は、就職試験にことごとく失敗。志のある同級生は、均等法の施行を見据えて、四年制に編入していきました。

短大を出ると、俗にいう「家事手伝い」になつてはみたものの、どうにも自分の居場所が定まらない。座るべき椅子がない毎日から逃げ出したい。その一心で、求人票に「経験不問」と書かれていた編集プロダクションの入社試験を受けました。短大の専攻は国文

科でしたが、決してモノカキ志望ではありませんでした。

ところが、まさかの瓢箪から駒。氷河期のマンモスは氷の中から這い出して、モノカキ見習いになりました。入社後、先輩や上司に命じられるがまま、さまざまな場所に出掛けては、出会いを文字に紡ぐ日々を送りました。原稿用紙に書いた自分の文字が活字になる。その景色は何度見ても新鮮で、喜びに満ちていました。個性を競う世界でのぎを削る多様な人々と接するモノカキという仕事に夢中になりました。

十人十色の形と暮らし

二十四歳の時、当時、報道カメラマンだった智幸と出会い、縁あつて結婚。それを機に退社し、フリーランスになりました。

時はバブル景気。駆け出しのモノカキでも、ありがたいことに仕事が次々と舞い込みました。その中のひとつに、大手企業が運営する料理サロンの会員向けPR誌がありました。年に四回、一冊丸ごと企画し、取材し、食にまつわる原稿やレシピを書くのが仕事でした。

その一連の作業の中で、うつわと食のかかわりをさまざまな角度から考え、作家さんの仕事場を訪ねる機会も増えました。情報収集のために毎年七月に江別市で開かれている「えべつやきもの市」にも、欠かさず足を運びました。やきもの市で出合い、取材を通じて、つくり手の真摯な仕事を間近に見て、

モノづくりへの思いを聞くほどに、良き使い手、語り部になれたらと願うようになりました。もともと、食関係の仕事が多く、食べるのが好きなことも手伝って、我が家の食器棚は、出会いの数だけ増えていった十人十色のうつわで埋め尽くされていったのでした。

北海道のうつわびと

好奇心と食い気を道連れに、モノカキの道を歩き続け、気づけば四半世紀が過ぎていました。

一昨年から一年がかりで、これまで我が家で日常に使い続けてきたうつわ、使ってみたいと思つたうつわのつくり手二十一組を、夫と一緒にあらためて取材。そして、昨年十一月に「北海道のうつわびと」という一冊の本にまとめ、世に送り出しました。

誌面では、つくり手の思いやライフスタイルとともに、日々の中で気軽に楽しめるうつわびとのヒントになる盛り付け例も豊富に紹介しています。この本の出版をきっかけに、つくり手の顔が見える北海道のうつわを日常の食卓で楽しむ人が一人でも多く増えることを願ってやみません。

森廣 広絵 もりひろ ひろえ

一九六〇年札幌生まれ、編集プロダクションを経て、八七年よりフリーランスのコピーライターとして官公庁、企業のPR誌、広告、新聞コラム、雑誌記事などの企画・制作を手がける。取材ジャンルは北海道の食、クラフト、旅、建築、暮らしなど、多岐にわたる。

Dilettante 悠々人語録

フリーランスのコピーライター、森廣広絵さんが、道内の陶芸家21組の作品と工房を紹介した本を出版しました。題して「北海道のうつわびと」。手仕事の温かさをたたえた個性豊かなうつわたちは、日々の食卓を耕す暮らしの道具という森廣広絵さんの悠々人語録です。

MY OLDIES



た。年賀状を書いて引き出しに入れ、そのまま投函するのを忘れるという恥ずかしい事件もあった。

昭和後期に廃線となった富内線に旭岡という所があった。四・五年の二年間を、小高い丘の上の小さな学校で過ごした。他人の山に入り秘密基地を作ったり、川遊びで溺れかけたり、振り返ればこれほど遊びまくった時期はほかにはない。通学路を時々青大将が横切った。

同じ管内の日高門別で小六と中の二年間を過ごす。野球に夢中であつた。急性腎炎で入院をした。その後通院中の投薬ミス(減量すべきを増量された)により一度死にかけた。今なら間違いなく訴訟沙汰になったところである。

私の父は旧国鉄職員であり、そのせいで転校を繰り返した。所属する鉄道管理局内での異動ではあるが、石狩・空知・上川・日高・胆振とそれなりの範囲を巡った。記憶を呼び戻す時、まず脳裏に浮かぶのは各地の駅舎あるいは居住した官舎である。この位置関係から町並み、通学路、遊び場等々を思い起こす。

小学校一・二年の時同じクラスだった二人の女子の名前と顔だけは、どういう訳か記憶から消えない。今はない幌内線の終着地幾春別だった。三年生の一学年だけ札幌で過ごし

高三目前に岩見沢転勤の話が出た。さすがにこの時はお付き合いを断り、初めての下宿生活をさせてもらった。この時から私は親元を離れて暮らすことになる。大学時代も帰省する場所が毎年異なった。最後迄付き合い合った弟には四回ほど記録で負けている。

悪いことばかりではないが、転校の繰り返しは子供とてあまり好ましいことではない。どの地に行っても通過するだけの、旅人的な感情が生まれかねない。また真に「母校」と呼べるものを持てず寂しい思いをする。

しかし現実には面白いもので、私が唯一顔を出している同窓会は、小六・中一の二年間を「通過」しただけの学校のものである。偶然もあるが、この種のものは世話人の熱意と人柄が大きくものを言う。

面白いと言えば、私が途中入社した当社には私の高校の先輩であるだけでなく、冒頭の閉校に至る小学校の先輩でもある方が偶然在職していた。おまけがある。私はその先輩の妹さんと二年間、同じ教室で机を並べていたらしい。その学校が三月で姿を消す。

(Y)

BOOK INFORMATION

一冊気になる 『最悪』

「最悪」 奥田英朗・著
講談社文庫(講談社)
定価九二〇円
(税込)
二〇〇二年九月
発行



ああもう嫌だ。怖くてもう読めない……。『最悪』だ……。『ふーん。『最悪』かあ。』なんて軽い気持ちで読み始めたのに、本当に「最悪」だった……。でも続きが気になるな……。でも怖いな……。ああ……。どうしよう……。なご、騒ぎながら読んだのが五年前だろっか。今でもあの時の不安感と恐怖は記憶に新しい。

主人公は三人。不況の中でも希望を捨てず、真面目に働く鉄工所社長、読了後は、心にズシリとくる重み

憂鬱を抑え付けながら日々をやり過ごす女性行員、孤独と惨めさを抱え、パチンコとカツアゲで生計を立てる若者。彼らの人生が、些細な出来事から狂い始めていく。

設定自体はよくありそうなものだが、心理描写の緻密さが人物にリアリティと親近感を与え、抵抗無く作品に入り込ませてくれる。平易で細かい説明が少くない文章も、読むのに苦痛が無い。

序盤に散りばめられる、平凡な日常と嫌な予感。三人のストーリーの配置、展開のバランスが巧妙で、徐々に読者の不安を煽っていく。

中盤から物語が加速し始めると、主人公に負けず劣らず、こちらにもパニックである。怖くて可哀相で見てられない。「もっこのページでハッピーエンドでいいじゃん……。残りはメモ帳でいいじゃん……。」と本気で思ったのをよく覚えている。

序盤に散りばめられる、平凡な日常と嫌な予感。三人のストーリーの配置、展開のバランスが巧妙で、徐々に読者の不安を煽っていく。

(T)

北海道の うつわびと21展

昨年十一月に上梓しました北のおくりものシリーズ「北海道のうつわびと」

(森廣広絵著)の出版を記念して、紀伊國屋書店札幌本店にて「北海道のうつわびと展21」を三月六日(土)から開催いたします。本書で紹介している陶器・ガラス・磁器作家二十一組の個性あふれる作品を展示即売いたします。また、作家の日常の仕事風景を写真パネルでご覧いただけます。

【出品作家】

〈陶器〉恵波ひでお(NAM工房・洞爺

湖町)、工藤和彦(旭川市)、浜田啓塑信(藍山窯・岩見沢市)。(森町)、中村二天(斜里窯・斜里町)、七尾佳洋・うた子(清水工房・厚沢部町)、福盛田眞智子(千古窯・江別市)、堂前守人(はぐだて工芸舎・元町ハウス・函館市)、毛利勝靖(むろん高砂窯・室蘭市)、馬渡新平(小樽市)、葛井乃理子(札幌市)、西村和(和陶制作工房・札幌市)、千尋悠子(ちひろ窯・旭川市)、南正剛(皆実窯・美瑛町)、土田隆之(隆香窯・小樽市)、恒枝直豆(葉葉窯・富良野市)。

〈ガラス〉菅井淳介(淳工房・旭川市)、西山亮(GLASSHAUS・長沼町)、くまがいマナ(工房ワタリガラス・由仁町)。

〈磁器〉大野耕太郎(ギャラリー陶居・滝川市)、武者千夏子(伊達市)、葛西義

※期間中日替わりで作家が来場します。

会期：三月六日(土)～三月十一日(木)
午前10時～午後七時
(最終日は、午後六時まで)
会場：紀伊國屋書店札幌本店
2Fギャラリー
札幌市中央区北五条西五丁目
Sapporo 55ビル
電話〇一一二二二二二二二二



■編集部から 2009年、書籍・雑誌の売り上げが21年ぶりに2兆円を割り込んだ。月刊誌の相次ぐ休刊、中堅出版社破綻の増加。長らく出版不況の中、大手印刷会社と大手出版社、大型書店の業務提携、出版業界とブックオフの共存など出版業界の再編成が進んでいる。小社は昨年、企画出版および出版のお手伝いをさせていただいた本が23冊。21年間で最高の出版点数でした。「走れ! ターウィン」、絵本「にこにこぎゅつ」などは高評を頂きました。今年も地域に根ざした出版社として、本を出したい多くの人たちの思いに応えていきます。(K)

●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL : <http://owl-online.jp>
E-mail : owl@nakanishi-shuppan.co.jp

●発行責任者／林下英二
●発行日／2010年1月20日 ●デザイン／上野修一



ホームページへ
アクセス!